令和５年　５月　２日（火）

あさひの日だまり

NO.５

辰野町立辰野東小学校　文責　片桐

～春の遠足へ行ってきました～

燃え立つ春を満喫

１日は、１年生、２年生、３年生が遠足へ行ってきました。私は１年生の遠足に一緒に行きました。１年生は、辰野駅まで町内を歩き、そのあと三輪神社で休憩をとりました。三輪神社の境内のケヤキの大木は新緑の葉を枝先につけ、いよいよ夏の日差しを受ける準備を進めていました。

最終目的地は童謡公園です。タニシやホタルが繁殖している水路脇を通り公園につきました。子どもたちにとっては日常の景色で、もしかしたら目新しい場所ではないかもしれません。でも、見知ったこの景色を改めて味わうことはもしかしたら意味のあることかもしれないな～と思う出来事が先日ありました。

私の子どもは、東京で数年間暮らした後長野県に帰郷し、現在長野市内で仕事をしています。その息子が先日家に帰ってきました。私の所用に付き合わせ辰野町と家を車で往復しました。その息子の車中での一言です「なんだかこの辺りはジブリの世界にいるみたいだ」

私は、この言葉を聞いてハッとしました。私にとっては全く新鮮さを感じない風景が、息子にとってはまるで映画の一コマのように見えたのです。そういわれてみれば、私の知っている東京の風景とは全く違う、山や木々に包まれたふるさとの地の風景は、まるでジブリの一コマを思い起こさせます。

遠足の日も、私が座る芝生の横に遊び疲れた一人の児童が腰を下ろし、目の前の山を見ながら、「山ってきれいだな～」としみじみとつぶやいていました。そして「先生、あそこに顔があるみたいだね！」と話を続けました。その子には燃え立つような山の木々が、顔の形を作っているように見えたのでしょう。

あらためて眺めるその山肌は、色々な種類の樹木が一斉に新芽を吹き、本当に緑に燃え上がるような勢いでした。

そんな山を背景に、子どもたちは本当に無邪気に遊具の周りを走り回っていました。湧き出るエネルギーは、あたりの山々の木々の芽吹きと重なりました。遠足の子どもたちは、この風景を目で見て記憶に焼き付けるというよりも、体のすべてを緑の中に投げ出して、景色の一部分になってしまっているようにさえ思えました。

この風景の一部になった子どもの多くは、やがて故郷を離れ都会で生活を始めます。そして、年が経ち終の棲家を探すとき「やはりあそこがいい！」と考えるように思うのです。遠足の意味ってもしかしたらそういうところにもあるのかもしれないと思いました。スナップ写真で遠足の様子を紹介します。

１年生　友達と一緒

１年生　樹の幹に身を任せ

３年生　ふるさとの自然の一部に

３年生　野原でまったり昼ご飯

２年生　大地に根を張り

２年生　絶対落ちないぞ！